



背中をポンポン

かわかみ ともこ
【河上 知子・広島県】

夕食後、息子は「お母さん、しんどい」と言ってきた。振り向くと、横になった息子の体が、ゆっくりと反っていった。次には全身がガクガクと動いた。ひきつけを起こしたのだ。病院へ着くまで、そして治療が終わるまで、7回もひきつけた。処置室から出てきた息子は、穏やかな寝顔に戻っていたが、そのまま入院することになった。

翌朝、目覚めた息子は、一変した姿を見せた。日焼けした顔や転んで擦りむいた膝の傷は、昨日の息子と変わらなかった。しかし、私と目を合わすこともなく、言葉も失って、ただベッドに横たわっていた。声を掛けても、頭や手足を動かすだけだ。私たちは異質な世界へ放り込まれたのではないかと、目の前の状況を疑った。

医師は夫と話していたが「大変だ」とつぶやいて病室を去った。その言葉が、私の涙腺のふたを外した。そこから何日泣き続けただろう。点滴を受け続けている息子の頭をなで、手をさすり、食事の介助をし、泣き続けた。泣いても泣いても心が軽くなることもなく、涙が枯れることもなかった。食べなくては駄目だと夫に言われて、買ってきてくれた巻きずしを泣きながら口に入れた。

その時の私へ声を掛ける人はいなかった。声を掛けることができなかったのだと思う。ところが、私の背中をポンポンとたたく人がいた。40歳前後の看護師だった。血圧の測定をして、ポンポン。点滴液を交換して、ポンポン。検温に来て、ポンポン。このポンポンが、いつの間にか優しい励ましの言葉に聞こえていた。反対に、「あなたは母親よ。しっかりしなさい」と叱咤(しった)の言葉にも聞こえ、少しずつ心を落ち着かせることができた。

あれから32年。36歳になった息子は、元気に障害者施設へ通っている。振り返れば、今まであの看護師のポンポンを何度も背中に呼び戻して生きてきたように思う。